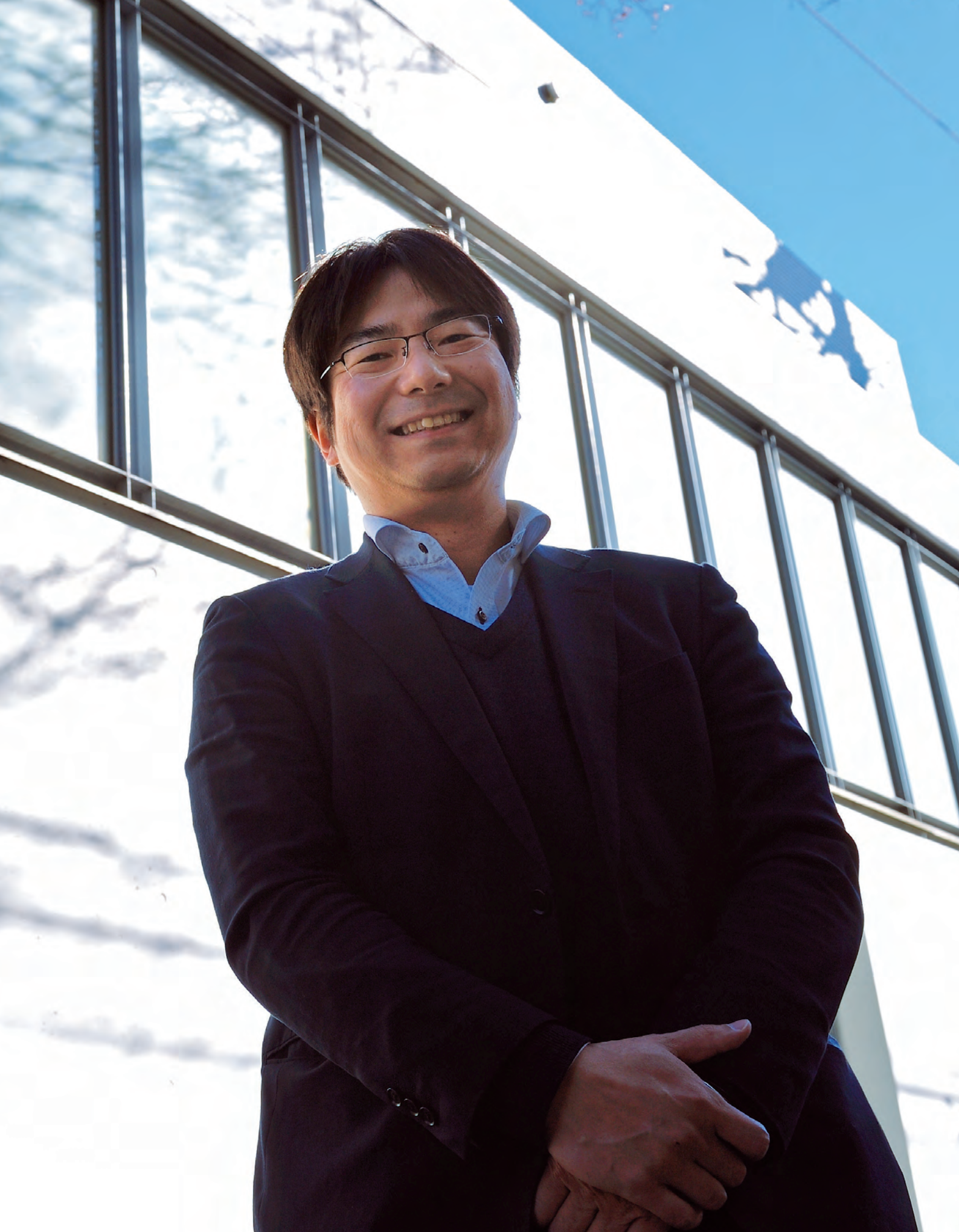




地域における薬局薬剤師の活動への 官僚たちの期待はきわめて高い

日本を代表する医療のシンクタンクである特定非営利活動法人日本医療政策機構の理事として政策提言を企画・立案する一方で、東京都内のみいクリニックの院長も務める宮田俊男氏。彼ならば、薬局や薬局薬剤師のあり方についても、マクロとミクロの両視点から語ってくれるに違いないと取材に臨んだが、果たして予想以上の展開となった。

「少子高齢化で、医療財源がこれほど厳しくなれば、当然、パイの奪い合いが起こります。年間医療費約40兆円のうち調剤医療費が約8兆円を占めているのですから、製薬会社や薬局が厳しい目にさらされるのも当たり前でしょう。特に厚生労働省（以下、厚労省）が医薬分業を進める中で、それがきちんと機能しているのが話題に上る機会は多く、薬局及び

今は、確かにしんどい。でも、 このときをサバイブできれば、 先は必ず明るい。

特定非営利活動法人日本医療政策機構理事／
みいクリニック院長

宮田 俊男

MY OPINION

—明日の薬剤師へ—

構成／武田 宏
文／及川 佐知枝
撮影／林 溪泉

薬局薬剤師が窮地に立たされているのは、紛れもない事実です」

ならば医薬分業は失敗であったと認め、院内調剤に時代は逆戻りしていくのかと問うと、宮田氏は、「ありえません」ときっぱり答える。

「地域における薬局薬剤師の活動に対する官僚たちの期待はきわめて高い。かかりつけ薬剤師・薬局の基本的な機能及び国民による主体的な健康の保持増進を積極的に支援する機能（健康サポート機能）などを持つ『健康サポート薬局』の構想を打ち出したのは、その証左と言えます。

OTCも含めた住民のセルフメディケーションの推進、ポリファーマシーの問題解決などにおいて果たせる役割は大きく、在宅医療の現場でも薬剤師がいつしよにいれば医師も看護師も助かります。薬学部が6年制に移行し薬剤師の専門性が高められることもあり、行政は薬剤師の専門家として薬剤師に、もっと医療に入り込んできてもらいたいと思っているはずです」

質の高い薬局と変わらない薬局との 2極分化が進んでいる

しかし、そこには大きなジレンマが存在すると宮田氏は指摘する。

「大きな方針の提示に、各薬局がついていこうにも、ついていくのが難しい現実があります。大規模薬局チェーンは、行政の動きに敏感で、体力もあれば、システムづくりも得意分野、ゆえに舵を切るのも早い。けれども地域の個人経営のような薬局は、そう

はいきません。

いろいろな機能を要求されても対応するのはとても無理、だから、かかりつけ薬局にならなくてもいい、それにそもそも集まってくるのは顔見知りの地元住民ばかりで、実質、かかりつけみたいなものだから——と考える経営者も多いでしょう。しかし、それでは、やがてその地域から薬局がなくなってしまうかもしれない。施策についていけず経営が苦しくなると薬局が潰れてしまったならば、地域包括ケアシステムにも支障が出ますし、極論するとその地域が廃墟になる可能性さえあるのです。



PROFILE

みやた・としお

- 1999年 早稲田大学理工学部卒業
- 2003年 大阪大学医学部卒業。以降、三井記念病院、大阪厚生年金病院、大阪大学医学部附属病院等で勤務
- 2009年 厚生労働省に入省し、税・社会保障一体改革、薬事法改正、臨床研究の活性化、ドラッグラグの解消等に從事
- 2013年 厚生労働省退官後、特定非営利活動法人日本医療政策機構に参画。内閣官房健康・医療戦略室戦略推進補佐官にも任命

現在、京都大学客員教授、大阪大学特任教授、国立がん研究センター政策室長、神奈川県顧問、セルフメディケーションアプリを医師と薬剤師でコラボして開発するベンチャー企業 Medical Compass代表取締役でもある

こうした格差は地域にも見られます。たとえば、薬剤師会などの意識が高い地域にある薬局では求められる機能を果たそうと努めますが、そうでないところの薬局は無策です。

現状、大きな問題は、非常に質の高い薬局と従前どおりの薬局と2極分化している点。現場も行政も頭を痛めています。本来であれば、日本薬剤師会が薬局全体の底上げをすべきなのでしょうが、それにもある程度、限界があり、悩ましいところです」

土地勘のない場所で病気になる 薬剤師の対応に感激！

みいクリニックの院長になったとき、宮田氏は近隣の薬局に自ら挨拶に出向いたという。通常ならば薬局が処方せんをまわしてほしいと挨拶に来るのが当たり前だろう。彼の行動の背景には忘れられない個人的な体験があった。

「北海道・札幌での講演を頼まれ、飛行機に乗った方がいいのですが、だんだん具合が悪くなってきた。新千歳空港に着くころには熱が出始めまして――。

ホテルで休んだのですが、良くなるどころか熱は高くなるばかり。土曜日で土地勘もなかったのど、とにかくOTCを買おうと外に出ると、ちょうど開いている薬局があったのですね。解熱剤ぐらいいは置いてあるだろうと入り、薬剤師さんに相談すると、ただならぬ様子に見えたのでしよう、『近くに開いている診療所があるから、お医者さんに診てもらったほうがいいですよ』と言う。そして、地図を書いて渡してくれるだけでなく、診療所に電話をして私が

行くことを知らせてくれたのです。

医師は丁寧に診察をしてくださり、もらった処方せんを紹介してくれた薬局に持っていくと、なんと薬が用意されていて、待ち時間ゼロで薬を受け取れました。医師が薬局に処方せんをファクスしておいてくれたらしいのです。体調が悪かったので、本当にありがたかった。しかも、薬の成分を理解して、その邪魔にならない栄養ドリンクを『元気になりますよ』とすすめてくれたのです。おかげで、その日の午後には支障なく講演を行うことができた。薬局ってすばらしい！感激しました」

地域の薬局が近隣の医療機関の状況を把握していれば、困っている患者に有効な情報提供ができる。薬局と連携する大切さを痛感した宮田氏は、近隣の薬局に行き、自院の特徴や得意分野などを説明し、単に処方せんをやり取りする相手ではなく、より良い医療を提供するパートナーとして接している。

相手は病人だけではない 健康な人のサポートもできる

前述のとおり宮田氏は、今、薬局と薬局薬剤師を取り巻く環境の厳しさを認めるが、しかし、未来は明るいはずだと話す。

「当クリニックには、がんサバイバーシップ部長と称するポストがあり、がん患者やその家族の方、がんになったらと不安に感じている方の相談に乗っています。今や2人にひとりとはがんになる時代ですからニーズは高いですね。また、待合室の一部のスペースで、がん患者さんの会が子ども服などを持ち寄

MY OPINION

—明日の薬剤師へ—

ってバザーを開催し、売上金をがんの研究に寄附したりなどしています。

薬局は、クリニックなどの医療機関にくらべると気軽に立ち寄れ、地域住民にすればいわばステーションのような場所。クリニックでもいろいろできるのですから、やり方によっては、社会貢献も兼ねた事業の芽も多くあるように思います」

薬局薬剤師については、面白い見方を交えながらその将来について語ってくれた。

「昨今、たとえばITの進歩で、『残る職業、残らない職業』なんて言葉を耳にするようになりましたが、その観点から言えば、薬局薬剤師は間違いなく『残る職業』です。逆に医師は生き残りが厳しくなる職業ですね（笑）。2025年、いわゆる団塊の世代が75歳以上になり複数の疾患を持つ高齢者があふれるわけですが、10年、15年たつてくると亡くなる方が増え、今度は高齢者が減ってくるフェーズに移ってきます。人口全体も減少傾向ですから当然、医師は今までどおりにはいかなくなるでしょう。」

一方、薬局薬剤師は、病人だけが相手ではなく健康な人に対しても健康のサポートが期待されています。当クリニックでは、自由診療の枠で、登山を趣味にしている方に高山病の予防薬を出したり、宴会シーズンには2日酔いの予防に効くとされる漢方薬を処方したりしています。薬剤師は処方薬ばかりを扱っていますが、その気になれば公的保険の外枠で健康な人に適切なOTCなどの提案・提供もできるのです。『医師から処方された薬でないと、なんとなく不安』。そんな市民が多いのは事実ですが、なんとと言っても薬剤の専門家で、薬については医師よ



みいクリニックでは待合室の一部のスペースをがん患者さんの会に提供。同会では、まだ着られる子ども服などを置いてバザーを開催し売上金をがんの研究機関に寄附している

りも詳しい。薬剤師の皆さんは、自信を持って新しい流れをつくってってください。おそらくもっとも難しいのは、薬剤師自身が、旧態依然の固定された概念から脱却することではないかと想像します」

OTCや健康食品、化粧品など、あまたの製品を取り扱う中で、来局者にいろいろなフルサービスを提供する。宮田氏の頭の中では未来の薬局の姿が、きつと具体的に思い浮かべられているのだろう。

「今は、とてもしんどい。でも、このときをサバイブして乗り切れば、先は必ず明るい」

確かに問題は山積している。しかし、どうにかできる。宮田氏は、言外にすばらしいメッセージを寄せてくれた。

MY OPINION

—明日の薬剤師へ—